

共生社会の実現に向けた生涯学習支援に係る実践研究事業
第3回コンソーシアム連携協議会 協議の記録
中部地区（11月11日）

【出席者】

| | |
|-----------------------------------|--------|
| 県立清武せいりゅう支援学校 | 松田 律子 |
| 宮崎大学教育学部学校教育課程発達支援教育コース | 若林 上総 |
| 学校法人宮崎総合学院 宮崎福祉医療カレッジ社会福祉士学科 | 保田 浩美 |
| 社会福祉法人宮崎県社会福祉協議会 地域ボランティア課 | 大山 晃代 |
| 一般社団法人 宮崎県手をつなぐ育成会 | 井上 あけみ |
| 宮崎県肢体不自由児・者父母の会連合会 | 田中 聡子 |
| 特定非営利活動法人 障害者自立応援センターYAH! DO みやざき | 山之内 俊夫 |
| 宮崎市教育委員会生涯学習課 | 松岡 真一郎 |
| 県福祉保健部障がい福祉課 | 元長 貴司 |

【協議の記録】

1 地区の取組の進捗状況

- R3の取組：委員の思いが強く、当事者同士の戸惑いがあった。また、自分達が招待される側ではなく、招待する側になりたい思いがあった。そんな中、何かを一緒にするには、仲間になろうということで、ボーリングに行くことで絆を深めた。
- R4の取組：「まずはやってみよう」をコンセプトに何かをしながら仲間づくりを行うこととし、その何かについては、スポーツによることとした。
- ① ニュースポーツ体験会の取組
参加者に合わせたルールの変更、Google フォームによる感想と反省、仮装をして楽しんだ。
- ② 自主サークル（やどかり）の立ち上げ
LINEで繋がり、企画提案。企画以外の場面でのやり取りもあった。（台風時など）
- ③ コラボレーション
 - ・ ボランティア協会が主催するパラスポーツ体験・交流とコラボ（当日70～80名ほどの参加）
 - ・ ボランティア協会とつながれたことが良かった。また、当日だけでなく、練習段階から関わることができたことも良かった。
 - ・ メリット：参加者集めや場所取りなどの労力が省ける。対象者が明確で準備がはかどる。
 - ・ 終了後に打ち上げを実施し、友好を深めた。

2 コンファレンスについて

- 中部地区としては、全ての団体が発表する案で進めたい。（A案）
- 発表者は自主サークルの方から選出する。発表資料等は、委員で作成する。

3 公民館等で講座を実施する持続可能な方策について

- 新たな事業を起こして公民館講座に申し込んでいる。（田中委員）
- 宮崎市として、公民館講座の2枠を空けている。
- 既にある公民館講座に「やどかり」が関わっていけるようにできると良い。

※ 課題としては、

- ① 継続
頑張りすぎず。キーマンとなる人との関わりを大切に。時代にあった運営方法を模索していく。
- ② 会員の確保
SNSの活用。事務局や連絡先などある程度の明確さが必要。
- インタビュー・ダイアログの登壇者について

共生社会の実現に向けた生涯学習支援に係る実践研究事業

第3回コンソーシアム連携協議会 協議の記録

南部地区（11月11日）

【出席者】

| | |
|-----------------------|-------|
| 県立都城きりしま支援学校 | 川越 浩司 |
| 県立小林こすもす支援学校 | 福崎 正浩 |
| 南九州大学人間発達学部子ども教育学科 | 野村 宗嗣 |
| 都城市障害者自立支援協議会 | 川口 貴博 |
| 特定非営利活動法人 宮崎県精神福祉連合会 | 衆畑 貴志 |
| 霧島おむすび自然学校 | 壹岐 博彦 |
| 子どもと家族・関係者の集まり ポン太クラブ | 外山 明美 |
| 都城市教育委員会生涯学習課 | 桑田 玲奈 |
| 小林市教育委員会社会教育課 | 高妻 司 |

【協議の記録】

○ 取組の進捗状況について

- ・ 10月 事前学習会（ボランティア講習会）
- ・ 11月5日（土） 「秋のあじわい体験 ～どんぐり村で自然あそび！～」
障がい者18名、保護者2名、事業所職員4名、どんぐり村管理者2名
ボランティア17名、幼児1名 総勢44名の参加

※ 課題・・・ボランティアの確保が難しかった。

- 志和池地区の川口氏を通じたことで確保できた。
- 顔見知りの関係でないとボランティアを呼びかけるのは難しい。
- 高齢者への連絡手段（メール×、携帯×）

- ・ 11月12日（土） 「深まる秋の志和池を楽しむ“フットパス体験”」予定
現在のところ19名参加予定（ボランティア29名参加予定）
→ スタッフを含め、総勢53名参加予定

○ コンファレンスの発表について

- ・ 上記の「秋のあじわい体験 ～どんぐり村で自然あそび！～」 「深まる秋の志和池を楽しむ“フットパス体験”」の様子を発表する。
- ・ 発表者：川越浩司先生（南部地区代表）・・・質疑・応答へのフォロー体制については検討
→ 志和池地区公民館及び小林市中央公民館にサテライト会場を設置予定

○ 公民館等における持続可能な方策について

- ・ 課題・・・* 関係機関との連携を円滑にするためには、早期の計画が必要
* 市の事業として開催すると、コロナの状況によっては中止せざるを得ない。
地域のボランティアを依頼する際の窓口が地域によって違う。

※ 小林市では、今年度試行的に公民館講座の中の健幸散策講座（フットパスウォーク）に障がい者の参加を呼びかける。事業所等への案内チラシの送付を障害福祉課が行う。また社会福祉協議会にはボランティア要請の協力をお願いする。（講座開催日：11月24日）。

共生社会の実現に向けた生涯学習支援に係る実践研究事業
 第3回コンソーシアム連携協議会 協議の記録
 北部地区（11月11日）

【出席者】

| | |
|--------------------|--------|
| 日向市地域福祉コーディネーター連絡会 | 成合 進也 |
| 株式会社グローバル・クリーン | 税田 和久 |
| te と te の会 | 甲斐 麻央 |
| 一般社団法人宮崎県作業療法士会 | 内勢 美絵子 |
| 宮崎LD・発達障がい親の会 フレンド | 猪股 重子 |
| 延岡市教育委員会社会教育課 | 飯野 小巻 |
| 延岡市健康福祉部障がい福祉課 | 黒木 奈都子 |

【協議の記録】

○ 取組の進捗状況について

- ・ クラウドファンディングで絵本を作成。この絵本は、10歳ぐらいまでに「多様性」について学んでほしいという思いで企画した。県内の小学校、支援学校に配り、知事、教育長へ渡した。
- ・ 今年10月に、ビルメンテナンス作業の授業を、延岡しろやま支援学校高等部で行った。民間企業で障がい者雇用を行っている、大人の世代で偏見を修正する難しさなどを感じた。
- ・ 23年前に、会社で障がい者雇用を始めた頃、障がい者差別解消法ができる前は、遠回しに障がい者の清掃を断る商業施設、病院、介護施設などがあつた。
- ・ 子どもの頃に、意図的に、地域の中で障がい者を理解する活動は必要。大人からも参加でき、取り組めるものが必要。
- ・ te と te の会では、子どもと親の困り感に焦点を当ててきた。特に、重度の障がいのある方、重い障がいのある方に手をかける必要があると感じている。8月にNPO法人の申請を行った。子ども食堂などにも参加した。発達障がいのある子ども、大人のトイレの問題、医療的ケアのある子どもを受け入れる施設の少なさ、障がい児認定前の子どもや親の支援等の課題に取り組みたい。
- ・ 日向ひまわり支援学校を、日向市教委の担当者と一緒に訪問し、進路担当の先生方と協議し、そこでヒントを得た。ふくし食堂を開催し、当事者など関係者との関係性作りを行いたい。
- ・ 障がい者の防災について考えることをテーマとして取り組む。災害時の行動について、その場で体験して学ぶ取組を考えている。コーヒーなどを飲みながら、地域の一般市民にも参加してもらい、地域の人間から障がいのある方へ、その学びに近づく機会としたい。
- ・ 日向市で行っている「人ものづくりフェア」で18講座行われているが、障がい者の参加もOKという返事をいただいている。次回の計画について話し合う際に、障がい者の参加について一緒に考えることになっている。地域福祉コーディネーターが事務局となって、ひまわり支援学校の児童生徒、小中学校の支援学級の児童生徒などに参加を呼びかける。
- ・ 障がいのある方たちと世間には、日常的な壁を感じる。消防団の団員も連れていきたい。地域には障がいのある方は必ずいる。消防団は「社会を支える」ということがテーマ。
- ・ 食べることはみんなが好きで取り組みやすい。障がいの特性に応じて、クールダウンできるスペースなどは必要。また、何かあつた時のために、サポートできる体制も必要。
- ・ 学生ボランティアも募る予定。
- ・ 学生がボランティアに来るなら、事前のレクチャーなどフォローが必要。専門家の存在が必要。
- ・ 参加したボランティアに、早めに来てもらい、ミーティングが必要だと考える。
- ・ 小学部低学年には多動の児童もいる。対応するボランティアは、それぞれ2名体制が必要。
- ・ 「卒業してから」の繋がりではなく、「外とのつながり」を在学時から想定して実践していくことが大切だと考える。その一つとして、公民館講座を在学時から体験することもよいと思う。場所はサンパークを考えている。

○ コンファレンスの発表について

- ・ 発表は「ふくし食堂」の取組を発表する。
- ・ 関係者数名で打ち合わせを行ってみてはどうか。
- ・ 声をかけてもらえれば参加したい。イベントは、これまで障がいのある方々に関わつたことのない人たちに参加して欲しい。間口を広げるには、ある程度はやりとりを仕込む必要もあると思う。取り組みやすいものがよい。
- ・ 困り感を共有し、関係性作りができればよい。発表内容については今後知らせる。